

安全地帯 待望のSACD誕生。 30有余年の時を越えてマスターサウンドがいま蘇る。

文： 黛 健司

最初の曲が流れ出した瞬間「もしかして新録音？」と、わが耳を疑った。しかしそれは、紛れもなくオリジナルアルバム音だった。ワインレッドの心～夏の終りのハーモニー～夢のつづき～恋の予感と、かつて愛した曲を聴き進むにつれ、久しく忘れていたあのころの感動が蘇ると同時に、安全地帯のサウンドが30有余年の眠りから目覚め、躍動する瞬間に立ち会っていることに興奮した。

ステレオサウンドが独自の選曲によって構成するSACD盤、Stereo Sound Original Selection Vol.3「安全地帯」には、これまでに発表されたオリジナル・スタジオ・アルバム全14作の中から18曲が収録されている。このアルバムの制作過程の取材を許され、アナログマスター音源をスチューダーのテーブルレコーダーで再生した音から(10/11/17/18曲目の4曲はデジタルマスター音源)、マスタリングが完了したSACDレイヤーのためのDSD信号、CDレイヤーのためのPCM信号の音までを聴くことができた。しかも、マスタリングを担当した日本コロムビア・チーフエンジニアの武沢茂さんがいつも座るミキシングコンソール前の特等席で！ おかげで積年の願望であった「スタジオの音」を確かめることができ、わたしにとってエポック

メイキングな取材となった。

武沢さんはアナログ爛熟期を知る練達のエンジニアで、アナログテープの再生にかかる執念は尋常ではない。ユニバーサルミュージックから慎重にハンドキャリーされたアナログマスターテープは、制作されてから30数年経過しているものもあり、テープの状態を安定させると同時に磁性体剥離などのトラブルを回避するために、数十度に温められたオープンに数時間入れられ加熱除湿してから再生する気の遣いようだ。使用するテーブルレコーダーは日本コロムビアが特別なチューニングを施した2トラック再生専用機で、 $\frac{1}{4}$ インチ幅の38cm/sec速度テープにはスチューダーA80を、 $\frac{1}{2}$ インチ幅の76cm/sec速度テープにはスチューダーA820が使用された。アナログマスターテープの録音状態を正確に再現するため、再生ヘッドのアジマス調整は徹底しておこなわれる。通常は、テープに録音されたテストトーンを再生し、オシロスコープのリサージュ波形を確認しながら調整するが、中にはテストトーンが録音されていないテープもあり、そんなときは耳で聴いて合わせるしかない。しかし武沢さんは、こともなげに聴感で再生ヘッドの角度を決めていく。プロのアジマス調整の技に、わたしは

ただただ驚くばかりだった。

整備の行き届いた機材と的確な調整によって再生されるアナログマスターテープの音には圧倒される。なんというエネルギー感、低域の安定感だろう。しかし、この素晴らしいアナログマスターの音に、武沢さんが調整の手を加えていくと、スタジオに流れる音がよりいっそう魅力的に、イキイキと躍動し始めるから不思議だ。まさに熟練のマスタリングエンジニアにして初めて可能な技だろう。武沢さんは「オリジナルの制作者たちの意図を尊重し、目指した音を想像し、再現するように心がけて」いるという。たしかにオリジナル音源の魅力はいっさい損なわれることなく、音像の立体感、シャープネス、サウンドステージの再現性などがあきらかに向上し、マスターサウンドに新たな生命が吹き込まれていく。

このハイブリッド盤のSACDレイヤーには、アナログマスターからDSD 2.8MHzにフラットトランスファーしたマスタリング音源を使用し、一方のCDレイヤーには、CDフォーマットの音の器に合わせたマスタリング音源をそれぞれ使用している。SACDとCDレイヤーの微妙な音の違いを聴き分けるのも、このアルバムの楽しみ方のひとつだろう。ぜひ、お試しあれ！



Analogue Master Tape



Mastering Engineer: Shigeru Buzawa (Nippon Columbia)



DAW "Pyramix", A/D Converter "Horus"
Clock Generator "Esoteric G-01X"